

古代の道路と車（3・1・19）

横田 健一（昭12・文甲）

昭和十二年文科の卒業で、私は文甲一でした。我々の同期の前田光嘉君（文甲二）が建設省の次官までなりまして、それから、道路公団の副総裁、総裁と天下りまして、同期の板倉創造君（文甲二）、西谷喜太郎君（文乙）の両君は道路公団の理事になりました。理事になる前に大体系長クラス位からスタートして、名神高速道路とか東名高速道路等の建設には、この諸君が大いに働いたのです。

その西谷喜太郎君が定年になりましたから、西日本ハイウェイパトロールという会社の社長になりました。その会社は高速道路で故障等を起している車がありますと、レッカー車を派遣して、それをつり上げて、持って行って修繕をする仕事の他、インターチェンジにはみなレストラン、喫茶店、みやげ物の店等がありますが、そういうのを経営しております。

その社内報に、ハイウェイ・パトロールという雑誌が有りまして、年に四回季刊で出しており

ます。それに私と、やはり同期の文丙の河野健二君、現在京都市立芸術大学の学長で、京都大学の名誉教授でもあります。この河野君と私が代り番こに随筆を書かされております。私は年に二回、七月号と新年号とに書いているのですが、新年号にはその年の干支の話を書いております。本年は羊の話を書かせてもらいました。昨年は馬の話を書きました。七月号の方にハイウエイ史雑考という題で、名神高速道路の様なハイウエイというのが、世界の古代ではどういうふうにして発達して来たか、そしてそこで走っている交通機関、車や馬について書かしてもらおうという事に致しまして、今まで七、八回書いたであります。

お手元のレジメに一・二・三・七・八と有りますが、抜けた年もあるんですが、最初ハイウエイとは何ぞやという事を書きました。字引ではハイウエイとは、公道とか、大きい道とか書いてありますが、そのそばにハイウエイマンという言葉が有ります。ハイウエイマンとは、泥棒、強盗だと書いてある。これは大変面白いと思いました。最初の頃にハイウエイマンは山賊、つまりハイウエイという様な所には山賊、強盗が出没する。それだけ獲物が多いということ、交通量が多いという事になる訳です。これは陸の道路だけではなくて、海上交通の方でもそうで、日本の海上交通は、島国ですから至る所に船はある訳です。やはり海賊にとって獲物が多いのは瀬戸内海です。もう少し時代が下れば日本海と、それから太平洋を難波（大阪）から江戸に行く様な航路というのもそうであります。

古代の道路と車

--「ハイウェイ・バトル」所載「ハイウェイ 史雑考」から--

- 一、 ハイウェイとハイウェイマン
- 二、 日本古代。『日本書紀』崇峻天皇2年(589 A. D.)条、「近江滿を東山道に遣して蝦夷の国を觀しめ、宋人臣を東海道に遣わして東方の海に浴える諸国の境を觀しめ、阿倍臣を北陸道に遣して、越等の諸国の境を觀しめた。
『大宝令』大路は山陽道(駅ごとに馬20匹)中路は東海道、東山道(駅ごとに10匹)小路は山陰道、北陸道、南海道、西海道(駅毎に馬10匹)別に竹内街道(丹比道)長尾街道(大津道)竜田道、上道、中道、下道、東高野街道
- 三、 西洋のチャリオットの発明。バビロニアのウル(ur)レオナード・ウーリーの発掘(1922から)。BC. 3500年頃。大英博物館蔵。モザイクのスタンダードの絵。四輪車ウル王墓の副葬品。
エジプト・ツタンカーメン(1350~42 B. C.)墓出土戦車。大英博物館アッシリヤ室。王の狩猟に戦車に乗っているレリーフのライオン狩。
- 四、 ソロモン王の戦車の町(旧約聖書列王紀。上の章15~8節。ソロモンはBC 968~928)
- 五、 ヒクソス(Hyksos)、ヒッタイト(Hittite)の影響。ソロモンは1400台の戦車と12000人の戦車隊員をもつ。ヒッタイトは全盛期に2500台を持つ。全カナーンとシリア連合軍は924台でエジプトのツトメス三世の720台と戦った。
アッシリアのシャルマネゼル三世の年代記に記す敵兵力の数。
○ダマスクスのベンハダド二世戦車1200台騎兵1200歩兵10000。
○イスラエルのアハブ戦車2000歩兵10000他略
- 六、 1928レオナルド・ウーリー発見ウル王墓59人殉葬者2両の4輪車各3頭の牛が引く。馬で挽く戦車の起源、馬は中東地方西部で家畜化された。
BC 4000年頃から
- 七、 馬で戦車を挽き始めたのはヒクソスでBC 1750頃に東方からエジプトへ侵入し、第15・16王朝を築く。フラヴィウス・ヨセフス。AD 37~95
「ユダヤ古代史」所引マネトの記述に見る。ヒクソスは第17王朝により追い出される。ツトメス4世王(1425~1412)ガシリアと戦車戦を行う。カデシュの戦ラムセス二世(1304~1238)とヒッタイトと戦う。エジプト軍は二人乗りヒッタイト三人乗りクレタ島の戦車タブレット。
- 八、 ガウガメラの戦アレキサンダーとダリウスの戦い。BC 331年10月1日。

けれども日本で海賊の一番古い初見は、『日本書紀』の雄略天皇紀にアヤシノコマロ（文石小麻呂）というものが出て参ります。

雄略天皇と申しますと、最近では埼玉県の稲荷山に鉄剣が出土して、ワカタケル大王という名前で銘文が出ております。西暦五世紀の後半位、大体四六〇年～四八〇年位の所の天皇だと思いますが、その時代にすでに海賊が瀬戸内海に現われているという様な現象が見られるので有ります。山賊や強盗の話で申しますと、『類従三代格』という古代の臨時の法律を集めた本が有り、大体九世紀位に武蔵の国に強盗が満ち満ちている。武蔵は今の東京都と埼玉県に当りますが、東海道と東山道が両方合さる所ですから、やはり強盗が多かったものと思われれます。

私が最初のハイウエイ・パトロールで初めて書いた号には、私は日本史が専門でして、日本古代のハイウエイと申しますと、お手もとの資料の(二)に、日本古代「日本書紀」崇峻天皇（五八九年AD）に、近江満を東山道に遣して蝦夷の国を觀しめ、（ししじのおみ）穴人臣を東海道に遣わして東方の海に沿える諸国の境を觀しめ、阿倍臣を北陸道に遣して、越等の諸国の境を觀しめた。とこういう記事があるのが、恐らく日本のハイウエイの早い記事ではないかと思ひます。勿論もっと其の前に、仁徳天皇の時に難波からずっと南の方へ、仁徳天皇は難波に都をされましたが、難波からまっすぐ南へ、現在の松原市辺りまで大きな道を作ったという記事が出ております。松原市辺りから東の方へ、飛鳥の方へと道を延ばしまして、二上山は雄岳と雌岳とある、その二つの岳の間の

窪みの所、これを竹ノ内峠と申しておりますが、竹ノ内峠を西から東へ通して現在の奈良県の飛鳥地方に至る東西の大きな道路を作ったという記事が、仁徳天皇紀に出ております。やはり飛鳥地方は四世紀から八世紀初まで古代の都のあったところで日本の中心でした。これは私は『竹ノ内街道』（向陽書房刊）という本が四年程前に出たプロローグを書いている時に作ってもらった地図です。

「大宝令」に大路は山陽道（駅ごとに馬20匹）中路は東海道・東山道（駅ごとに馬10匹）小路は山陰道・北陸道・南海道・西海道（駅毎に馬10匹）とあります。別に竹内街道（たけひち丹比道）長尾街道（大津道）竜田道・かみつみち上道・なかつみち中道・しもつみち下道・東高野街道などが古代の大和・河内地方の主要な道路です。

第十代の崇神天皇から第十一代垂仁天皇、第十二代景行天皇の都は桜井市の三輪山の麓の辺りにありました。雄略天皇の都は三輪山の東南側にあったと推定されますが、二上山の竹内峠から東へ、都まで向かった横大路という道は、竹内街道につながっています。その竹内街道の北一キロに平行して東西に走る大路があつて、これを長尾街道と申しております。

更に北方の交通路として、竜田道というのは、大和川が奈良盆地から河内の方へ流れ出して行く所、二上山の北側でありますがここを亀の瀬といっている。急流になっていきます。そのやや東北の法隆寺の南の方を通過して東へ進み、今の奈良の都に至るこれを今は国道25号線といっています。

す。奈良盆地がありますと、平城京がありまして、そのずっと南へ12 kmほど下ったところに、桜井市の三輪山があります。富士山型の美しい山であります。そこから西へ向かう大和三山のある地方一帯が、飛鳥地方であります。奈良の都の朱雀大路、南北に通ずる中央の大きな道を南へ下って行くと平城京（奈良の都）の前の都であった藤原京がある。藤原京の東のはしの大路が中ツ道であります。西の大路が下ツ道で、三輪山の西の麓の南北の大路が上ツ道であります。こういう道が大体西暦の七世紀か八世紀の間に南北の三本の大きな道が出ております。

難波の都はご承知の様に応神天皇の終わりから造られました。四世紀の終りから応神天皇、五世紀の初めに仁徳天皇が難波に都をされますが、その仁徳天皇の時に難波京の中央の大路をずうっと南へ伸ばすと、今の松原市であります。五世紀の初めにこの南北の大路が出来たと言われている。推古天皇の時に更にこれを延長拡大した様であります。大体古代の日本の都は、四世紀末にできた難波、そして七世紀の末、六九四年に造りはじめた藤原の宮、更に八世紀の初めに平城京が出来たのです。この難波京から南北の大通りが堺まで出来て、堺から東へ向かう竹内街道が、二上山の東へ越え、飛鳥地方のこちらに入りましたのを横大路と申しております。なお古い街道と致しましては、この生駒山系が奈良県と大阪府の中間、河内と大和の境にあり、その南の方は金剛山脈、葛城山脈と続くのでありますが、東高野街道が、山脈のその西側を南北に走っています。今の国道一七〇号線です。

前述の『竹内街道』という本と、『東高野街道』という本が向陽書房という所から出版されております。私とその街道の概説を書かされました。

大体、仁徳天皇の五世紀の初めから、七世紀の藤原京が出来る頃までに、車はあったらしいのですけれども、『古事記』や『日本書紀』には殆ど記事がありません。一番早く車という物が出て来る記事は、第十七代の履中天皇、仁徳天皇の長男ですね、履中天皇の時に車持部という朝廷所屬の車を管理する役人の車持君が有りました。九州に宗像神社という神社があり、現在福岡市の東の方の宗像駅のそばにあります。この神は三体の海の女神であります。宗像神社に属する車持部を車持の君が、神社の車持部を支配する権利があると称して、自分の勝手に神の人民を使つたというので神様のたたりがあつた。それで皇妃黒媛が死んだので、占なつたところ、車持の民を車持君が勝手に使用したので祟があつたという記事があつたのが、車に関する一番古い記事だろうと思います。

履中天皇と申しますと、仁徳天皇の次の天皇ですから、大体五世紀の前半、第二、四半世紀位になりました。四百三十四十年位の所ではないかと思うんですが、この頃には車があつたらしいけれども、それがどういう構造の物か、どういうふうに使われたか分かりません。しかし大体日本は道路の整備がヨーロッパに比べまして非常に遅れております。ヨーロッパでは車は随分古い訳で、私昭和三十八年（一九六三年）の九月にイタリアへ参りました時に、例のポンペイの

遺跡に参りましたら、(ポンペイの遺跡はヴェスヴィアスの火山が紀元七九年に噴火し、その灰で埋まった町であります。)町が掘り出されまして、道路にはつきりと車の轍わだちあとの痕が残っているのを、ガイドさんが示して説明してくれたのを覚えております。あれは西暦紀元後でありまして、ヴェスヴィアスの噴火がローマ時代です。

天下の大道はローマに通ずると、中国では長安に通ずると言われ、ヨーロッパでは早くから、西暦紀元前から道が整備されておって車が発達してるんですが、日本の道の整備が遅れているという事が、やはり車の発達が遅れたということではないかと思うのでございます。

日本の古代では一番大きな道は山陽道でありまして、奈良の都から西の方太宰府に至る間が大路です。東海道、東山道などは、第二級の中路です。山陰道や北陸道は小路です。いずれも、一定区間ごとに駅があります。駅は馬へんが書いてあります様に、馬が置かれてあって、公用で出張する役人はその馬を徴発して乗る事が出来たのであります。それは駅鈴という鈴があり、立方形の鈴であります。隠岐島に玉若酢神社という神社が、島後の西郷町の西の方にありまして、ここに国宝の駅鈴がございます。其の後二ヶ所程で発掘されて、河内辺りでも出土致しました。そういう駅鈴を公用の使いは与えられまして、駅の馬を借りる事が出来る。そして駅の馬に乗って次の駅まで行ってそれを返して、又別の馬を借りて、次の駅からその次の駅まで乗りついで行くというやり方です。大体駅と駅との間は、私も昭和三十年に西宮市史の編算が始まった時に、兵

庫島の武庫郡の駅の距離を計って見ましたら、大体十六キロ―十七キロ位が駅の距離です。だからそれ位は、レンタホース、レンタカーの様な、レンタホースで乗り次いで行くという事をやっていた様で、まだ律令時代と言われる七、八、九世紀では車は日本のハイウエーに充分に使われていなかったんではないかと思ひます。

しかし正倉院文書を読みますと、車が盛んに出てまいりまして、これは重い物資を運ぶのに、都の中ないしは都に近い国々では、官庁や寺、神社、貴族、豪族などが車を持ち、物を乗せて運んでおった事が充分に考えられます。大体運んでおる物を見ますと、お米の様な食糧品ですね、米俵は普通は馬に乗せて、馬の両側に、ふりわけにして一俵づつ乗せて、その上に一俵と、計三俵運ぶのが一匹の馬の運搬量ですね。馬では運べない材木等を車で運ぶという事をやっております。例えば材木は奈良の都の北側、木津川が流れておってそして淀川の方へ入り、淀川が難波の方へ入る。伊賀の山地から材木を筏にして流して来る。そうするとここに木津という所があり、木津は木の津で港ですから、これは山城の国の木津町に当ります。ここから奈良坂という山を越えまして、奈良の都に運ぶ様な事をするんですが、そういうのに車等を使う事があつた様です。木材等の柱、柱等と言っても車に長物は、今のトラックみたいに運ばせんから、一丈二尺とか、長くとも一丈六尺位に切つて運ぶ。板等も車に乗せて運んだ様です。

やはり水路があると運び易いですが、最近奈良国立文化財研究所の報告では、奈良の都の南部

では東西方向の掘り割りを作つて、佐保川と連絡するという事をやって、やはり水路という物は盛んに使われておつた様です。この材木は古い建築、奈良時代とか平安時代辺りの建築の、掘立柱が掘り出されますと、柱の端に穴が明けてあつて、この穴に縄を通して水路を引っぱって行くという様な事を致しました様で、そうすると重たい材木でも水路に浮かべますと、三、四人の人で大きい材木でも引っぱって行けますから、端の所に穴を明けておるのが必ず見られるのであります。

昭和三十八年に在外研究員でヨーロッパへやつてもらつた時に、ドイツのハンブルクから四、五〇キロ東南のリュートネブルグへ参りました。中世末から近世初期（16、17世紀）の建築が沢山ある町で、ハンブルクから四、五〇キロ運河が入っている、その終点に大きな中世式の木の起重機があつて重い物を陸に引っぱり上げる様になっている。ハンザ同盟の都市なんです。やはり東西を問わず水路という物は重量物の運搬に多く用いられたという事がよくわかる訳です。『東高野街道』にも書いておりますが、大体難波の都は、上町台地の上にあり、もとはこの台地が南から北へ大阪湾に突き出ていた岬です。今の淀川河口辺りからずうと東の方へ生駒の麓まで、ちよつと入り海になっておりまして、河内湖とか河内潟とか言つておつた様でございます。

河内というのは、大体入海になっておつて、大和川が南から北へ流れていて、淀川と大和川の両方の川が合わさつて、現在の寝屋川市、四条畷市から守口市、摂津市、大東市、東大阪市、八

尾市の北部辺りまではずっと入海になっておった。これを河内、おとしうち凡河内、大河内等と言っておった様です。

それで木材等は大和川を上流から下流の難波の方へ流して来る。或は琵琶湖沿岸や木津川の上流、桂川の上流から淀川を通して流して来ます。そして『万葉集』の藤原の宮のえだち（役）の民の歌という——あれなどは琵琶湖の湖岸の田上山辺りの木を伐って難波へおろして、そして大和川からずっと奈良県の方へ引っぱって上ったという事が推定される訳であります。こういう風に入海でありましたから、南北に走る生駒山脈がありますと、河内の南北の街道は、この水べりと生駒山脈西麓の中間の間の狭い道を南方に通行する。これが東高野街道で、現在の国道170号線になっています。

江戸時代まで北河内の辺に南北8キロ、東西2キロの深野池などという大きな池が残っておりました。其の他いくつかの池がありまして、そういうのを埋め立て水田にした。それに鴻池という豪商（両替商）がおおいに土地の開拓に資本を投下致しまして、明治時代に鴻池財閥が出来上ったと言われているのであります。

レジュメの(三) 車の起源は、チャリオットと言われる戦車です。西谷君の社内報の『ハイウェイ・パトロール』にチャリオットのことを書きはじめたのです。今日ここへ来る途中に丸善に寄って本を見てましたら、ペルシャ文明の案内書がありまして、これに奇麗なチャリオットが出て

るなと思って買って来たのです。これが二輪車で二人乗の戦車で馬が三頭で挽いております写真です。

チャリオットについては「十戒」という映画が昭和33年、34年頃に来ました。60年安保のちょっと前頃です。あれはモーゼというイスラエルの指導者、予言者がエジプトの大王ラムセス二世の時代に、四〇万人の、エジプトに奴隷になって行っていたイスラエル人を引きつけて、西から東へ紅海を通り、シナイ半島に渡り、乳と蜜の流るる国であるカナンの祖先の地、現在のイスラエルへつれて行く、その紅海を渡ります時に、海が真二つに両方に分れて、海の間には平地が出来て、そこをモーゼが四十万人のユダヤ人をつれて渡る。それをラムセス二世の戦車隊が追いかけて行く。ユダヤ人がシナイ半島の方に上陸してラムセス二世の戦車隊が走っている時に両方の海が崩れて来まして、その戦車隊がおぼれ死ぬというのが一番見せ場でした。

それより数年後にベンハー (Ben Hur) という映画が来たんです。これはローマ帝制時代の初期なんです。キリスト教徒がローマ人によって迫害される。その迫害される色んな場面があって、ライオンのいる闘技場でユダヤ人がライオンと戦う所があります。また戦車競走があります。戦車、チャリオットの戦のことはアレキサンダー大王のガウゲメラの戦の所で申しますが、大體西暦紀元前三世紀迄は実戦用の物ですが、ローマ共和制時代の末期になってまいりますと、スポーツの競走用の戦車が出来まして、競技場でどちらが早くスタジアムを廻るか競争します。

キリスト教徒のベンハーがチャリオットでローマ人と競走する所が出て来るのです。あれが映画の一番の見せ場です。あの見せ場の所で、相手の方が卑怯な事を致します。それは、車軸の両側に鎌がつき出て付いておりまして、鎌が廻る、それで戦車が接触致しますと、その鎌で馬の足が切られたりする様な卑怯な事をする。

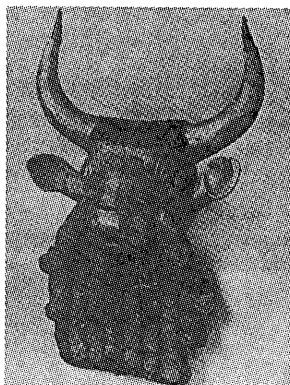
その鎌付きの戦車という物はペルシャの発明らしく、ダリウス一世はペルシャの大王(521-486B.C.在位)ですが、その王が鎌付の戦車を使ったという記録があるんです。チャリオットの末期には鎌付戦車の両側の鎌が廻り、相手の兵を切るという。勿論、歩兵隊の中に乗り込んで行くと歩兵がみな切られてしまう訳です。

西洋のチャリオットの発明はバビロニアのウル、これはユウフラテス川とチグリス川が一緒になる河口のあたりにありました。いま問題になっております湾岸戦争をやっているイラクの南部であります、ウルという王国が出来まして、西暦紀元前四千年代、大体B.C.三五〇〇年頃の国ではないかと言われております。これをイギリスの考古学者のレオナルド・ウーリー(Leonald Woolley)という学者が、一九二一年〜二八年頃迄七年間程かけて発掘致しましたのであります。イギリスのペリカンブックス、ペリカン叢書に、『カルデアのウル』(Ur of the Caldees)という本があります。これがレオナルド・ウーリーの七年間の発掘の記録です。大変興味深い、本当に小説を読んでいる様な面白い本ですが、大体メソポタミヤあたりからイランにかけてはテペと

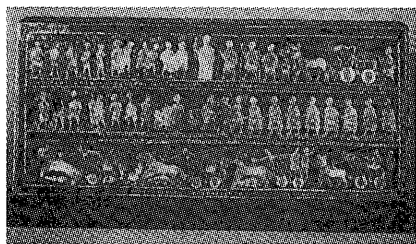
かテルとか言われる巨大な丘があちこちに散存しているんですが、そのテペとかテルとか言われるのが古代都市の跡でありまして、それを掘り下げてまいりますと、大体あの辺りの古代都市の家は全部天日煉瓦の家ですが、そういう日干し煉瓦の家は、ほぼ大体二十五年位、三十年もつといわれています。焼いた煉瓦ではないのです。私も昭和五十五年に敦煌やトルファンなどのシルクロードに行きました。あちこちの村で型に粘土をはめて日干し煉瓦を作っているのを見た事があります。ああいう古代都市は崩れると又其の上に日干し煉瓦の家を作るといので、二十層三十層という様な日干し煉瓦の家が出来ると言われております。それでああいうテペとかテルとか言われる様な丘の町が出来ますと、その中央に神殿が出来ます。ギリシャで言えばアテネのアクロポリスです。そういう神殿をジグラットと言ってありますが、レオナルド・ウーリーはユウフラテス川の河口の大きなジグラットを掘り下げて行つた。そうすると日干しの煉瓦の家が何層かある下からは、今度は粘土ばかりの非常に厚い層が出て来た。粘土ばかりというのは洪水で上流から流されて来た粘土の堆積ではないかといっています。其の層を突破致しますと其の下に大きな王様の墓が出て来て、それがウル王様の墓であるという事がわかつたのです。

ロンドンのブリティッシュミュージアム（大英博物館）に、ウル王の出土品の特別室があります。そこから色々な物が出てゐんですが、ウル王の王墓から出た物に、部屋の前に59人の人が殉死をしている（図参考）。

以下4枚の写真は、“The Great Archaeologist” by E.Baconからの引用である。



ウル王墓発見の黄金製の牡牛頭部、
髪は瑠璃製



ウル王墓発見の貝製モザイクパネル。
スメル軍団とその戦車



ウル王墓における59人の殉葬と6頭の
牛に牽かれた2輛の車。
A. フォレストイエの復原想像図、生前。



左写真の殉葬で死んでいるところ
の復原想像図。A. フォレストイエ図

牛が挽いているチャリオットの復元図とスタンダードというモザイクの三段になっている図があります。ウル時代の戦車、牛が挽くのだから戦車じゃなかった。ただ人が輸送される車であったと考えられる訳です。もっと時間的な余裕があつて準備して、写真をコピーしてお配り出来たらよかったです。昨日借りに行ったものですから失礼しました。とにかく三五〇〇年程昔の王墓が出て来て、その出土品の中には金の器が沢山有りまして、そしてブリティッシュミュージアムに、私はイギリスにいる間に六回行きました。本当に面白い。フランスでもルーブルに六回行ったんで、其の後、昨年、一昨年またルーブルへ参りまして、今迄に八回行きました。あの二つの博物館は何回見ても面白いです。王墓から黄金の器がぞくぞく出て、恐らくエジプトも古代王権と致しましては、大体西暦紀元前四千年代ぐらいから王権が、第一王朝辺りが芽生えている訳です。メソポタミヤもほぼエジプトと平行して発達している。しかしこの時代はまだチャリオットを挽くのが牛でありまして、馬ではない。それでは馬がいつ頃からチャリオットを挽く様になったかという事が問題であります。

(三)にエジプトのツタンカーメン王(一三五〇―四二BC)墓出土戦車という物があります。これはカイロの博物館にあります。

私は昭和三十八年四月十二日にカイロの博物館でツタンカーメンの物を見たのであります。それから大英博物館のアッシリヤ室には、レリーフの非常に大きなパネルがありますが、そのパネ

ルにアッシリヤの王様がライオン狩をしている光景が表されているものがあります。王たちが戦車の上から、ライオンが口をあいて飛びかかって来る、そのライオンを射る、そういう絵が表わされております。ライオンが矢に貫かれて血を吐いたりしている様な残酷な所が出てゐますが、アッシリヤの王さまはライオンを平素飼っていて、そして広い庭にはなして、チャリオットで走りながら狩猟したといふんです。まあ大体アッシリヤですから西暦紀元一千年代の古い所かもしれませんが、ツタンカーメンでありますと、(二三五〇―四二二)になる訳です。

先程の十戒の映画に出て来るラムセス二世はBCの一二〇〇年代の後半ですが、その頃になると馬が挽く戦車という物が盛んに活躍をする様になる訳であります。

(四)の方は一寸時代が下るかも知れませんが、旧約聖書を見ますと、列王紀、或は列王紀略等と言っておりますが、その上巻の十五―十八節に、イスラエルのソロモン王は(BC九六八―九二八年)頃の人、つまりダビデ王の子供で、西暦紀元前十世紀の人であります。聖書にはソロモンの造った色々な町の名前が出て来る中に、戦車の町があったのであります。

これはどうもソロモン王の軍隊の駐屯地で、戦車隊の駐屯地があったんじゃないかと、聖書の注釈者等によつて言われるのであります。戦車隊というものが、ソロモン王によつて使われていたという事です。

(五)の所で、エジプトを東から攻略したヒクソスという国が小アジアにあった。ヒッタイトの影

響を受けたという説があるのですが、これが割合早く馬に戦車を挽かしたと言われているのであります。ヒッタイトも多分そうだろうと思いますが、どちらも現在のトルコの中央ないし東の方のアナトリアの高地地帯に出現した騎馬民族の国家であります。

ヒクソスは大体西暦紀元前で申しますと、一六五〇年頃位ではないかというんですが、西暦紀元前十七世紀にトルコ方面から興りまして、エジプトに攻込みまして、エジプトを一時西暦紀元前十七世紀の終りから十六世紀頃に征服していた時代があると言われておるのであります。

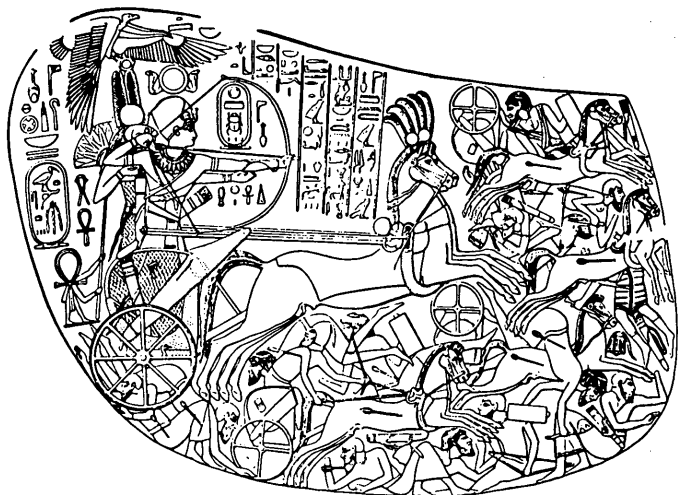
(七)参考 馬で戦車を挽き始めたのはヒクソスでBC一七五〇年頃に東方からエジプトへ侵入し、第15・16王朝はエジプト人の王朝じゃなくって、東方の異民族の王朝でありました。その事は西暦紀元後ADの第一世紀に三七年〜九五年頃に生きていたフラヴィウス・ヨセフス (Flavius Josephus 37-95AD) という人が『ユダヤ古代史』という本を書いておりまして、これはキリスト教徒ではないんですが、キリスト教という物を、原始キリスト教を客観的に外側から眺めた物として非常に有名で、私は三高の頃に山谷省吾先生にドイツ語と法制経済を教わったんですが、山谷先生はクリスチャンで、三高のYMCAの顧問で、課外に旧約聖書と新約聖書の原典批判を講義されました。古代のイスラエルの歴史から原始キリスト教史の講義をなさった時に、たびたびフラヴィウス・ヨセフスの「ユダヤ古代史」を引用された記憶があります。それにヒクソスが第十七王朝によって追い出されるまで、二百年位エジプトを支配していて、その間に馬ということも

のが車を挽くという、そういう事を持ち込んだと記している訳です。

(五)に返って

ソロモンが一四〇〇台の戦車と一二〇〇〇人の戦車隊員を持っていたと言われるのですから、これは大変な数で、現在湾岸戦争でフセイン・イラク大統領の戦車が五千五百台とかいってますが、ですから丁度イラクが早くから戦車という物を馬に挽かして、中近東の覇権をにぎったという事が察せられる訳でありまして、フセインはそういうヒクソスの栄華の夢を追ってるのかもしれない。とにかく第十七王朝のツトモス四世王（一四二五―一四一二BC）つまりBCの一五〇〇年代に追い出されたという訳で、ツトモス四世とチャリオット（図参考）、こういうのが戦車戦だという事になる訳であります。（図参考）ウル王墓に於ける59人の殉葬と六頭の牛に挽かれた二両の車というものの、これはフォレスティエという人が復元した想像図でありまして実写ではありません。そういう墓の、沢山の人が倒れている。車の残骸もある。また牛の骨もあるという。それから復元してウル王墓に、ウル王様が死んで葬られた時に、こういう様な格好で戦車隊員も、牛も生き埋めにされたのではないかと言われているのです。

こういう殉葬殉死ということは中国でも行なわれておりまして、中国でも戦後まだ昭和三十年頃に戦国時代の中国の墓で、23両の戦車を埋めた墓が見つかったのです。殉死だけで言えば、殷の時代の河南省の侯家荘の王墓では、二五〇人余の大量の殉死というものを埋めたお墓が見つ



チャリオットの戦い

ツトモス4世

かつておりますから、めずらしくないの
 かもしれません。日本人でも耶馬台国の
 女王卑弥呼が亡くなった時に百余人が殉
 葬されたという「魏志倭人伝」の記事が
 ありますから、そういう現象は随分ある
 んだろうと思います。

なおフオレスティエが復元した図のも
 う一つ上にウル王墓発見のモザイクパネ
 ル、スメル軍団とその戦車というものが
 ありますが、これは色付のモザイクで地
 色が水色の中に白とか明るい桃色等の人
 間と行列が描かれているのですが、其の
 一番上の右端にやはり牛が挽っぱってい
 るチャリオットと、車に挽かれて走って
 いる様な光景が描かれておりまして、こ
 れが大体BC三五〇〇年前位のものであ

ろうかと思われます（図参考）。

左がBC六世紀の四頭引の戦車（後期カナーン。カナーンはイスラエル）。ですから西暦紀元前まだ一千年代、ソロモンあたりより後だと思えますが、カナーンの二頭挽き一人乗車。

なお実験考古学という事をやる人がおりました、実験考古学で戦車を作って復元して走らせる、最大で四〇キロのスピードが出たと実験が報告されております。それはツタンカーメンの車がそうだったんじゃないかというのは、全部が金属製だと重たいので、人間が乗る様な所を、皮紐で編んだ様な床にすると軽くて、時速が38〜40キロ位のスピードが出るといふ実験の結果が出て来ます。あの頃には今の様なボールベアリングはありませんから、余りスピードを出すと車軸とそのケースとの摩擦熱がひどくて、長距離は走れんのかなと思うんです。

チャリオットは野戦で使いますと、山の多い日本なんかと違います、ヨーロッパは平坦な草原が割合多いですから、そういう所を走ってやれるんでしょうが、しかし随分ひっくり返る事があつたんじゃないかと言われております。なおチャリオットを使った戦車戦で申しますと、遠距離では両方が近づきながら弓矢で射て、射撃戦をやる。それからもう一つはジャベリンという投げ槍を随分使ったのではないかと言われております。そして勿論歩兵に対しては戦車で蹂躞をします。特にアレキサンダー王時代にダリウス一世というペルシャの王が発明した鎌付戦車がありますと、勿論蹂躞が出来る訳であります。

それからカデシユの戦、ラムセスⅡ世（一二九二—一二二五）まで、この当時は長生きをした王さんですね。70歳以上までですね。ヒッタイトと戦った戦いが、戦車戦としては大きな戦いとして有名な戦争であります。カデシユの戦いにエジプト軍が勝ったのかヒッタイト軍が勝ったのか問題がありますが、オロンテス河の川端にカデシユという町に根拠地がありまして、そこにヒッタイト軍が潜んでおりまして、それをエジプト軍が攻めた、と、いうんですが、ヒッタイトの戦車隊の別働隊がエジプト軍の後から廻って、エジプト軍の中心に襲いかかってエジプト軍を全滅させるはずが、エジプト軍の別働隊が又他の方向から到着して、ヒッタイト軍に気づかない内に攻めたので、ラムセス二世はかううじて残軍を救い出す事が出来たと言われております。ですからこれはラムセスの時代でも割合後で、西暦紀元前一三〇〇年代の後半になる訳です。

もう一つクレータ島の戦車タレットについて話します。クレータ島は地中海の東部にある東西約二五〇キロ、南々30〜40キロの細長い島があるんですが、そこに大きなクノッソスの宮殿がサー・アーサー・エヴァンズ（Sir Arthur J. Evans 1851—1941）によって発見されたんです。一五〇メートル四方もある大きな宮殿を丁度一九〇〇年頃から、イギリスの考古学者のサー・アーサー・エヴァンズが発掘を致しまして、非常に立派な宮殿の跡が出て来たんですね。大体それがBCの一四〇〇〜一五〇〇年位の物ではないかと言われているんですが、もう少し古くから続いているんです。BCの二千年頃からミノア文明が栄えるんですが、その末期にクレータ島は破

壊され、また埋められてしまふんですが、クレータ島王国には文字がありまして、文字をほりつけた粘土の板が非常に沢山出ております。

BC一四〇〇年ー一三七〇年頃に崩壊して、そして宮殿には木材が沢山使つてあつて、大きな火事があつて焼失してしまふ。残つたタブレットを読むと、ある一個所から武士に関するタブレットが非常に沢山出たと言われておるのであります。その中に戦車に関するタブレットがありまして、その戦車の絵等が描いてありまして、大体その総数は四〇〇輛を越える車があつたと推定されております。四〇〇輛の車というものは、ああいふ地中海の島でどうして使うのか。ヨーロッパの本土ならわかるのですが、島で四〇〇輛はどうしたんだろうという疑問もあるんですが、とにかく戦車に関する文献と致しましては、BC一四〇〇ー一五〇〇年前に書かれた文字が出てゐるので非常に有名でありまして、其の戦車部隊があつて、そしてチャドウィックという人がリニアーBといわれる文字を解読して、復元した所では少なくとも82輛の戦車の表意文字がしるされてゐるという研究があります。そしてこのクレータ島のミノア王朝がBC一二〇〇年頃までに滅ぶのですが、それがどうして滅んだのか、それがギリシャの大陸方面からドーリア民族が南下して来てそして滅ぼしたとか、色んな事が言われております。

最後にガウガメラの戦いというアレキサンダーがペルシャの大王と戦つた話ですが、アレキサンダーがギリシャ統一致しまして、マケドニヤに興りまして、次第に東の方へ進んで遠くイン

ドのインダス川流域まで進む訳です。アレキサンダーにとってその東征を阻む一番大きな障害を
なしたものが、ペルシャのダリウス大王の帝国でありまして、西暦紀元前三三四年にダーダネル
ス海峡に近いウラニクス、ついで三三三年にシリアのイッソスで大きな戦争をやりまして、其の
時は戦車は地形の関係なんかで、主兵器にはなっておりません。イッソスではダリウスは戦車を
乗用として逃げるのに、いのちからがらで戦車を捨てて逃げたと言われているのです。

ガウメラの戦いでペルシャ軍は二〇〇台の戦車を用意したと言われていますが、山岳地帯
で使用出来ないのです、アレキサンダーが山岳地帯で戦わない様に陣をしいて待ち受けてい
たと言われております。アレキサンダー軍は歩兵四万人、騎兵七千人、ペルシャ軍はそれを遙か
に上まわる数だと推定されておりますが、ダリウスの第一線の最左翼にスキタイヤ人の騎兵隊、
その右に一〇〇台の戦車、中央に五〇台の戦車、その右に五〇台の戦車、合計二〇〇台を配置し
たと言われておりまして、最右翼に騎兵を置いた。一番右翼に騎兵を置くというのは、伝統的に
包囲する作戦で、洋の東西を問わずやる訳です。

第二線の左翼はベッソスという將軍の率いる騎兵隊、中央は歩兵と弓部隊、右翼はマゼウスと
いう將軍の騎兵隊、ダリウスは中央部隊の真中にいて一番後衛はアジアの騎兵隊がいたという。
アレキサンダーは常に右翼に重点を置いて自ら直衛の騎兵隊、コンパニオンを率いて敵に近く陣
し、舞台は左翼が敵から遠ざかる斜の線、やはりこれは包囲隊型、これはアレキサンダーがギリ

シャの名将、エパミノンドスの作戦を受けついだと言われているのです。そして最左翼にはパルメニューの率いるギリシャの最精鋭の騎兵隊が陣した。ギリシャ人は常に中央の中核地帯にはフアランクスという方形陣を作りまして、大きな盾と弓矢と槍を持っていた部隊が中央にいる訳です。

そして戦いが始まりますと、アレキサンダーはコンパニオン騎兵隊が敵左翼の一〇〇台の戦車に直面しているという事が分かった。それで騎兵を更に右に転じて、アレキサンダーの戦車部隊が親衛部隊にあたった。こういう事で戦って、ペルシャ騎兵隊に空き間が出来た、その空き間にアレキサンダーは自分の歩兵隊を進入させて自分の方のコンパニオン騎兵隊と共に突撃したのでペルシャ軍が敗れたというのがガウガメラの戦いです。ガウガメラの戦いが大体顕著な戦車戦の、西洋では最後の戦で、其の後はスポーツ化して行くのです。

東洋におきましては、中国にはすでに殷の時代に戦車が来ておりましたようで、ご承知の様にBC一〇〇〇年頃に牧野の戦いという、周の武王と殷の紂王との戦いにおきましては、『書経』に、武王の戎車三〇〇輛、という言葉が出ております。戦車の事を戎車という言葉を使っております。殷・周の戦に殷の戦車の数は分かりませんが、周の方は三〇〇輛をくり出したという事が分かるのでありまして、それ以後、周代から戦国時代、更に漢代に至るまで使われていますが、しかしご承知の様に周の終りから戦国を通じ、漢代の、漢の武帝の時に匈奴と大きな戦争をして

征服するんですが、匈奴の方は騎馬隊をくり出す訳です。その騎兵隊に比べますとやはり戦車はスピードが遅いのです。車を挽^ひつぱりますから。それでやはり戦車隊というものの価値、意味が漢の頃からだんだんうすれまして、騎兵隊の方が非常に重視される様になります。

やっぱりヨーロッパの方におきましてもアレキサンダー以後、騎兵隊の方が重くなります。戦車がすたれるのは、騎兵隊の方が速いスピードで相手を包囲する事が出来るからだろうと思われる訳でございます。

どうも準備不充分で、まとまらぬお話を申し上げまして大変失礼致しましたが、長時間にわたりましてご清聴頂きましてありがとうございます。

（関西大学名誉教授・花園大学客員教授）